

● 本好きでなくても楽しめる図書館の一面 ●

# 図書館ウォーカー

## 一旅のついでに図書館へ

オラシオ 著

A5・230頁 定価2,530円(本体2,300円+税10%) ISBN978-4-8169-2952-6 2023年1月刊行

- 2019年11月から青森県の地方紙「陸奥新報」に連載中の人気旅エッセイ「図書館ウォーカー」を単行本化。
- 図書館スタッフとして勤務した経験を生かし、辿り着くまでの過程や街の風物など“図書館の外側”を重点的に描くことで、図書館の重要性や新たな楽しみ方を提案。行ってみたい、住んでみたいと思えるエッセイです。
- 単行本化にあたり、66編を選び加筆・修正、コラムも書き下ろし、旅ガイドとしても機能するように、豊富なカラー写真と公共交通機関+徒歩でのアクセス方法、付近のおすすめスポットなどを追加しました。全都道府県を網羅しています。

### 【著者略歴】

#### オラシオ(白尾 嘉規)

ライター、エッセイスト。大阪育ち青森市在住。

2019年11月から陸奥新報で「図書館ウォーカー」を連載中。旅先で訪ねた図書館は350以上。

公共図書館員として8年間勤務経験あり。

「図書館へ行こう!! (洋泉社MOOK)」(洋泉社 2016)、「図書館徹底活用術」(寺尾隆監修 洋泉社2017)に分担執筆や編集協力の形で関わる。

音楽の分野ではコンピレーションCD「ポーランド・ピアノリズム」「ポーランド・リリシズム」(CORE PORT) 選曲解説の他、ライター執筆など多数。

note フォロワー3.5万超 (<https://note.com/horacio/>)

### まえがきより

旅に出た。運転免許を持っていないので、鉄道とバスを乗り継ぐ旅になる。運行本数の少ない地方だからか、乗り継ぎ時間が小一時間ほど空いてしまった。さてどうしよう。(中略)でも、私なら、その街の図書館に行く。だって私は、旅のついでに図書館を訪ねる「図書館ウォーカー」なのだから。本書にはそんな旅の数々が収録されている。


この時点で「旅先で図書館に行っていきたい何をするんですか?」と訊きたくなった方もいらっしゃるだろう。また実際に旅先でも「なぜ旅行者が図書館に来たの?」という反応をされることも多かった。まあそうですね。私も最初は「旅のさなかに図書館に行ってもやることがない」と思っていた。基本的に図書館では、よそから来た旅行者は本を借りられない。その館でしかできないような特別な調べものでもない限り、滞在時間もせいぜい30分どまりだろう。詰んだ。ところが私はいくつもの旅を経て、1冊も本を借りられなくても、むしろ旅先で図書館を訪ねるほうが、よりこの施設を楽しめるのかもしれないと考えようになったのだ。

2022.12

お問い合わせは… **日外アソシエーツ 営業局**

TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <https://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	注文書	図書館ウォーカー 一旅のついでに図書館へ 定価2,530円(本体2,300円+税10%) ISBN978-4-8169-2952-6	冊
		 9784816929526	

リノベがつなぐ過去と現在

## 小国町図書館（熊本県）

リノベーションが一大ブームだ。歴史ある街で、観光客におすすめのおしゃれスポットとして紹介されるカフェやショップの半分くらいはリノベ物件だとは言い過ぎだろうか。積み重ねられた伝統を、現代の視点で再構築する。リノベ精神は建築のみならず芸術や工芸にも通じるように思う。特に欧州の先進的な音楽にはそのスピリットを強く感じる。アートとの共通点があるから、デザインの優れ、人の目を惹かせるリノベ建築がたくさん生み出されているのかも。青森県内だと、旅館を再利用した八戸市小中野の「ソールブランチ新丁」や、古い民家をうまく使った和田市の「Cafe Happy Tree」など素晴らしいリノベカフェがある。ぜひ訪ねて欲しい。

ただ、図書館は依然としてランド・ビルド方式が幅を利かいかにも公共施設然とした、無粋いせいもあるだろう。リノベ前提として、元々あった建物の価値を持つていくことが必要だ。りつつある今、新しいあり方に索中なのだろう。近年は名建築書館が増えてきた。何十年、何建物が増えたと例が出てくるといってリノベという短

まだトピックが少ないが、ぜひご紹介したい例がある。熊本県の小国町図書館だ。小国町は、温泉で有名な大分県日田市と絶景でんこ盛りの熊本県阿蘇市の中間くらいに位置する。今や国内外の観光客に人気の黒川温泉は、隣接する南小国町にある。では小国町の名所はどこなのか。それはCMなどで有名になった「鍋ヶ滝」だ。滝の裏にも入れるという景観は、幻想的な美しさで多くの観光客の目を虜にし

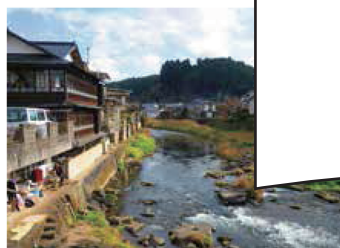
地元の人に道を尋ねたら、囁き出されてしまった。距離だけなら歩いて行けそうに思えるが、道のアツブダウンが激しく数時間はかかるとのこと。

貧乏旅行だったのでタクシーも使えず、それならばと街歩きがてら訪ねたのがこの図書館だ。正直言って何も期待していなかったが、前に立って驚いた。旧肥後銀行の格調高い石造りの建物がリノベされたものだったのだ。扇形に開いたエントランスの石段や両脇の柱の風格たるや。入館すると再び驚く。巨大な樹がフロアの真ん中に立ち、2階の天井まで吹き抜け。壁には細長く伸びた窓がたくさん並び館内の採光は豊かだ。この樹は1999年に台風で3分の2が倒れた天然記念物「阿弥陀杉」の倒壊部分の一部だそう。ここにもリノベ精神があった。

阿蘇側に抜ける路線バスは、陽に輝く草原や壮大なカルデラなどの絶景が続く。小国町訪問の締めとして、必ず乗って欲しい。



現代アートのような道の駅小国のガラス壁



のんびり散歩がびったりの小国の街並み